

睡餘小錄

翠

千立西書  
〇二冊



和書  
三一六〇六號

史七三

庫文閣内	
一丸	三六
函	和
内閣文庫	
番號	和 31606
冊數	・ 2 ( 1 )
函號	198 150

198-150



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





閑 42

松喜



騰録小録序



しはむし小なるをなむらあ  
き曲はまきくはるりし  
くさしねをゆふまはあつあたるま  
うねれいさうきくはるりあむに  
くさしあまうきくはるりあむに  
きくはるりあむに



198-100



あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに

上  
一

あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに  
あまのこゝろをいかにしむるに



月をさるるけりてはあはれしくなり  
丁にさるるさるるものさるるけり

文化三年正月

西村勘解由判官出羽守正邦主

源勘解由

上二

睡餘小録上目次

畧以時  
代相次

伊都内親王手判

西國巡禮札

惺窩先生義絶置文

福島正則卿注文

八千代小藤艶書

好物訓蒙圖彙

宋板太平寰宇記

松田頼隆吉口宣案

石川丈山劔刀

宮本武蔵印

石井元政艶書

浅野長矩主印



武林隆重印

小野寺秀和夫婦短冊

宝井其角手簡

信長之釜

大石良雄手簡

横川宗利請取

芭蕉蠻刀圖

戲場之驗

雜錄小録之目次

伊都内親王自胤紹運録セウケイロク伊豆にほろぬ桓武帝は  
皇女にほろぬ在原行平業平乃御母とあり行平は  
父阿保親王孝叔母の伊豆内親王武定とあり  
少和此手判天長年間山階寺に願文母押とあり  
少く筆者と楊逸等あり今上石とあり世帯に流  
布にけ利とありて其面目を摹して臨紙帝乃  
内書にもほろぬあり御手判切とあり  
願出切とあり所ふり判あり

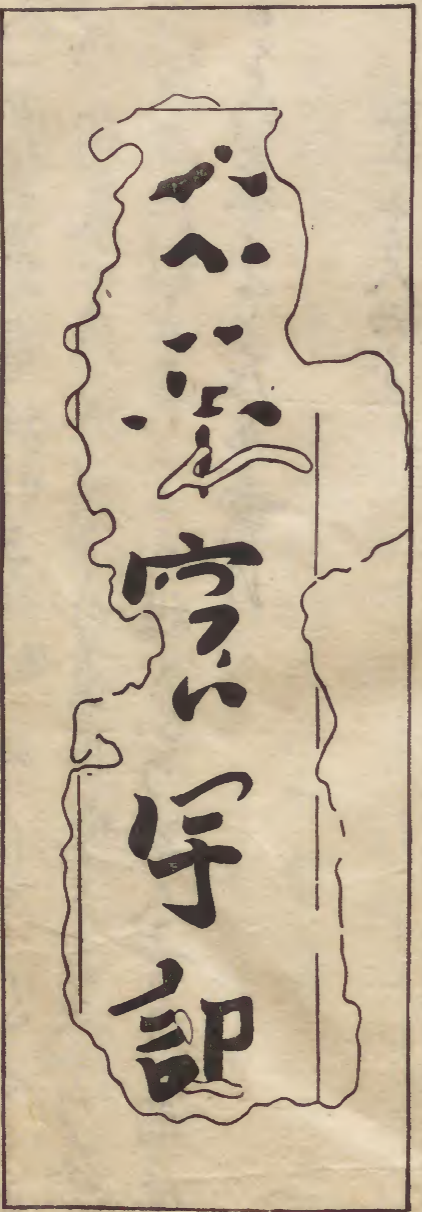






往昔我邦より紙を渡して摺りてその如くは接ぎにこの本邦  
 の印も大内本は利本などにて此説を以てるは案板  
 には事蹟頗る異唐山別よ一種の紙かぐり大内本は利本活  
 字本等好むの辨ベンキ シヨモク疑書目も見たり又この裏に記の表紙の  
 厚みアサキを凡二かばりもり紙かぐりしとて淳熙ジンキ紹熙慶元寶祐  
 等の記年の事と古紙の如く是を合巻制す是又賞とて  
 按るに案考宗淳熙元年と高倉院義安四年にあり

在縣西十里南接蒼梧北通道州山有古度木實

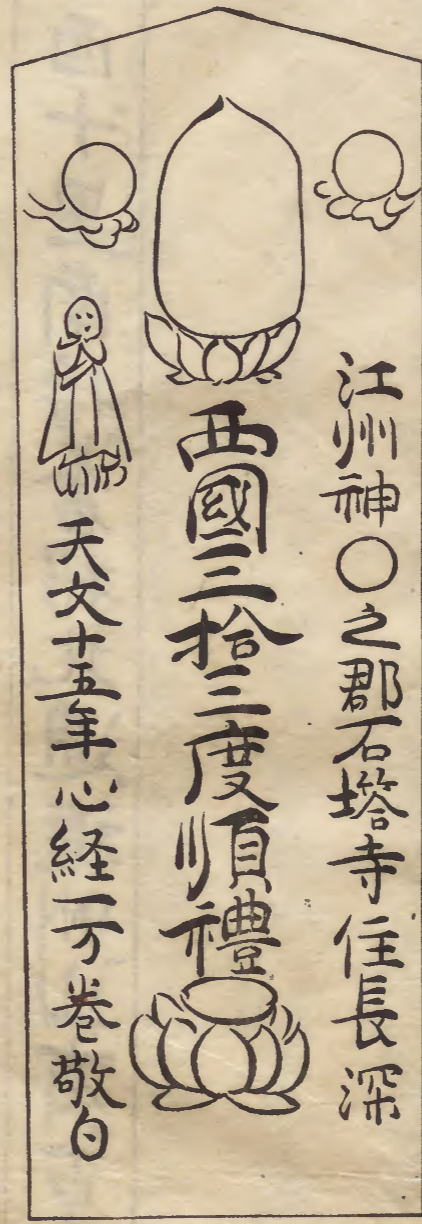




西國順禮の夏日蓮上人が書す。近日諸國の觀音が順拜  
 ところの一兩輩茅庵が叩きみ下。ゆりた〜〜〜と  
 とも札紙の夏を應永の頃より専らゆり〜〜〜と見たり。今京  
 師が順禮の古に札を藏する人往くあり友人寺井菊居が  
 花でるもの摹して左に載る。

堅き人六分

江州神〇之郡石塔寺住長深



天文十五年心經一万卷敬白

真鍮を〜〜〜

分六寸三横

上六

堅き又を寸本としりて〜

奥州柳津之住人 三年  
 西國卅三所之巡禮只一人 一王  
 明應五丁三月日 参詣

ア八寸二横

は余予の見たるもの

- 應永十九年四月奥州白川住人與二郎
  - 文明十一年八月紀伊國伊都郡古摩村彦五郎  
 右京師人服部周益所藏 共本公以て傳
  - 文明三年四月丹州保津住般若左衛門尉  
 右京師人久我屋利右衛門所藏 和以て傳
  - 永正七年江州山本村住人松田太郎兵衛尉  
 右浪華人大黒屋善藏所藏 本公以て傳
- す〜〜〜應永以後の〜〜〜



上卿廣橋大納言

胤

永祿二年十二月十日 宣旨

平頼隆

宣叙後五位下

藏人頭左中辨藤原淳光 奉

上七

此之松田豊前守頼隆主叙爵シヨウシヤンの口宣案なり廣橋六國光公なり  
淳光の柙原大納言より袖判を義輝公より足利殿共世の武家  
の口宣案より御判を加へらるる見ゆなり

然一筆書きたるに甲申年也子拙老に于叙後之御  
自然於田舎令記きたるに由院の中無人なる事なかり  
相傳ふ事相入るる注為他の心一子宗義等存る事  
是の如く文禄元年の壬辰十月に義隆上洛仕へて叙後  
帝首座を拙老傳へし相傳ふ事なかり子拙老有御狀



新々好金名全云云文福二年二月葬有座名法皇女  
可之刺 六条省西堂和勝之義持之流法皇女極之極光  
對面之字いふ云々今度□□以柳原大納言之及法理  
五月十日由院□□出之御書に連ひる及是也  
公界之遂對面之字云々後五言行の通々東前入  
魂之極神の字云々いふ依の對極光死を任の時葬有  
座の字云々いふ自法皇女之流法皇女極之極光  
遊海之流法皇女之流法皇女極之極光  
之別 五條入の中一書一云云と云々及法皇女極之極光

上八

海濱好金名全云云

普庵院住持

文福二年甲午六月廿六日

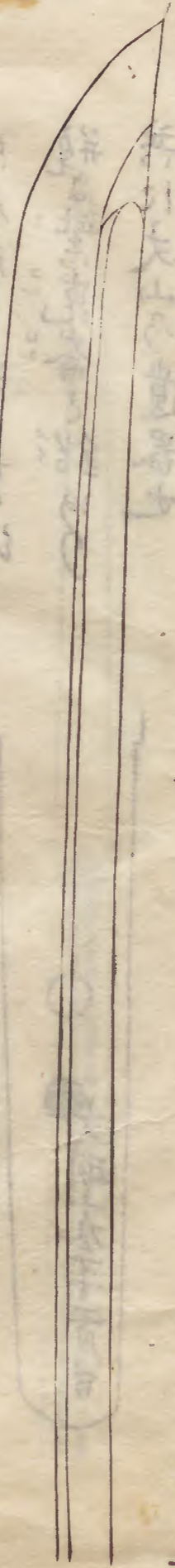
壽泉和志

壽泉和尚名清叔相國寺普庵院に住次下冷泉為其の  
の子に大德寺董甫仲和尚の弟なり惺寓先生れ為  
中書叔父多々或書小惺寓叔清叔の字云々いふ云々の事  
得ら先生と云々僧と云々いふ云々の事云々  
其の書法非に補く云々文珠唱會と

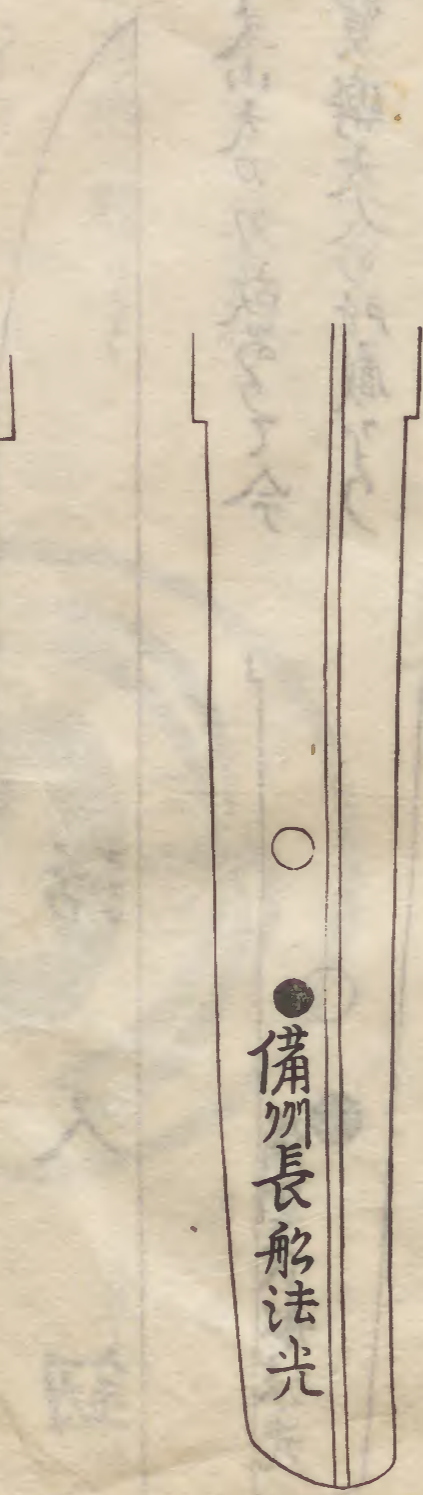


呼より奉文文禄三年の葬に歴世四歳のころ也按じると  
 先生此頃より憤り以て奔りて終に儒士歸りてけい免  
 少名文に名氏甫字を斂夫と改む惟富の其早也あひ  
 妙壽院の号と号し一まの隠るは北内山人  
 と稱しキヨハクシウ奉白集にせり山人とてあは則ち是なり  
 元和五年に生く幸氏世壽五十九林雅山那波活石  
 堀香庵菅得彦松永昌三三宅七年等とて皆  
 當時に大衆として先生に門より出たり

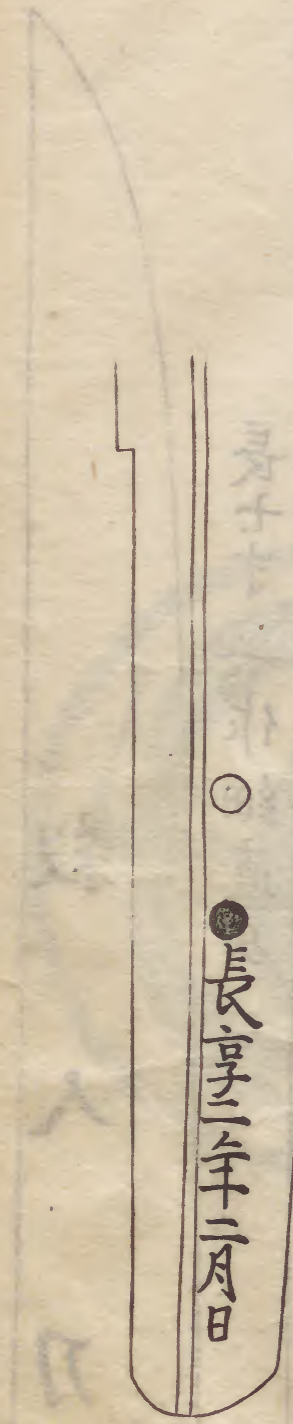
長二尺一寸乱刃



●備前長船法光



●長享二年二月日





殺人刀

長七寸平作細直刃

活入刃

丈山太刀刀故ありて今

賀樂大人の所蔵なり

一乗寺渡辺氏小安藝

照廣テルヒロ脇差茄子形の酒

瓶シコンシロは紫崑崙と銘あり

共に丈山乃遺器也

備洲長船法光

文明十九年二月日

上十



法光太刀に掛る

鐔ツバハ信長公より

婚ムコ万里小路大納言

亮房卿へ贈らる

物なり

表裏同



厚子

壹分



光

一火少袋布の地紅信子

信乃色極子

一才香箱の地唐草荷珍

地黒紅信子  
比薩黄總子

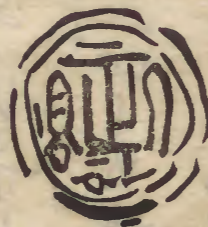
一下帯

上

上  
十一

あゝ年内申調山子

十月十日  
羽左吉



宗理吉

羽左太者羽柴左衛門太夫の中畧なり







Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho) on the left page. The text is arranged in several vertical columns, starting from the right side of the page and moving left. The characters are fluid and connected, typical of the Edo period.

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho) on the right page. The text is arranged in several vertical columns, starting from the right side of the page and moving left. The characters are fluid and connected, typical of the Edo period.

上十三





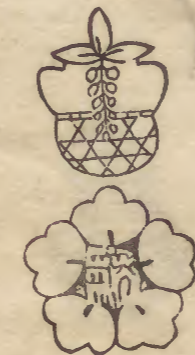
Handwritten text in cursive style, likely a signature or part of a letter.

君の御返

Handwritten text in cursive style, possibly a date or recipient information.

Handwritten text in cursive style, possibly a name or title.

Handwritten text in cursive style, possibly a name or title.



上十四

はる代名に藤子小孫名を鳳子とのお書は終り  
全盛ありはる代名に藤子との御返は終り  
と終りしはる代名に藤子との御返は終り  
と終りしはる代名に藤子との御返は終り  
と終りしはる代名に藤子との御返は終り  
何諸も繼り載り石野出西村出南寺  
正邦大夫の御返は終り

Small rectangular stamp or seal in the top left corner of the left page.













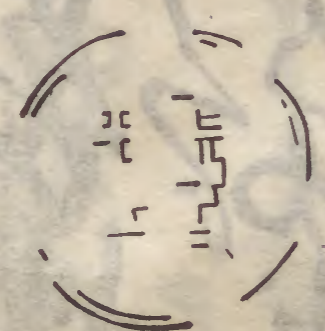






武林、印文よびびく恨あ

按とくに印文柱を長短の及字カシジを家臣生瀬重左衛門が  
 時々の書お押る所なり



想嫁 相安 賣女 夜發



下妻のたまひ

訓蒙圖彙 今此處より上りの大和のふん  
 五事のふんをわきまにせよ。さうさうのまん  
 さまのふんが。ねまれのふんをさうさう  
 常例のふんをさうさう

人置が鼻



たまひのふん

のこたを



Handwritten text in cursive style (sōsho) on the left page. The characters are highly stylized and difficult to decipher precisely, but appear to be a continuous line of writing.

Handwritten text in cursive style (sōsho) on the right page. The characters are highly stylized and difficult to decipher precisely, but appear to be a continuous line of writing.







五

香とふ柴市

左所切米と内仕と出納法

横河

元禄二年己亥月六

菊池氏の藏り

上廿二

多しとて自記水少  
江崎特あまの  
秋の行儀  
君  
三  
取



其角の句諸人共知らぬ是も其全文ありて載らり硯水六梅集  
 其角茅子とく類相子の作者あり

うらみすゝみ 菊  
 芥子能ハ洞カ  
 百世のさうら  
 昔名をこしらへて  
 肺肝子儼いさ  
 あらまゝ  
 くらり十ニテ



此釜多々伊勢  
 芦屋あり  
 信長より入  
 左京亮宗継主  
 お賜の共甚あり  
 一々給夫あり

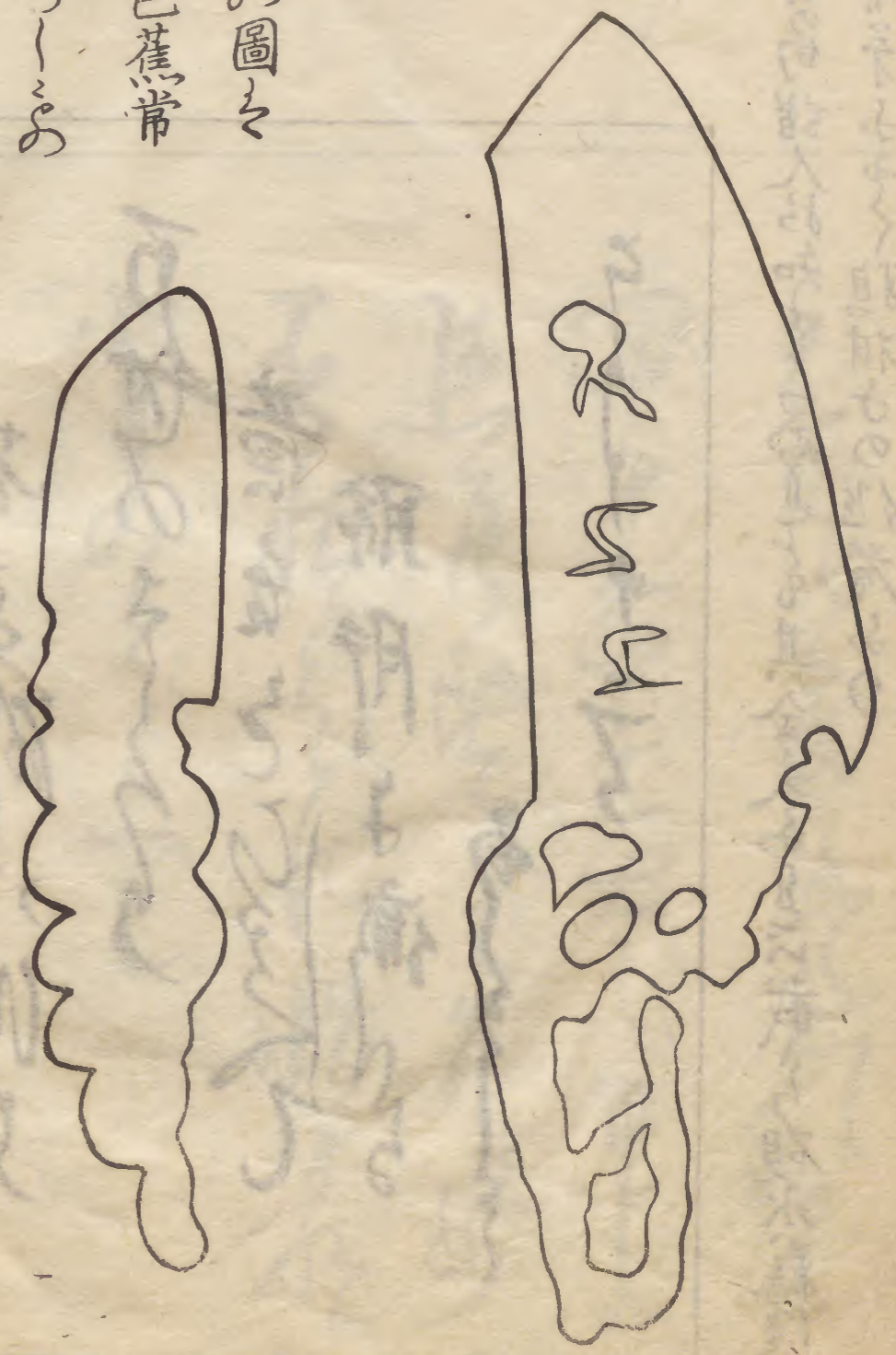


バンノウ  
 蠻刀の圖

俳人芭蕉常

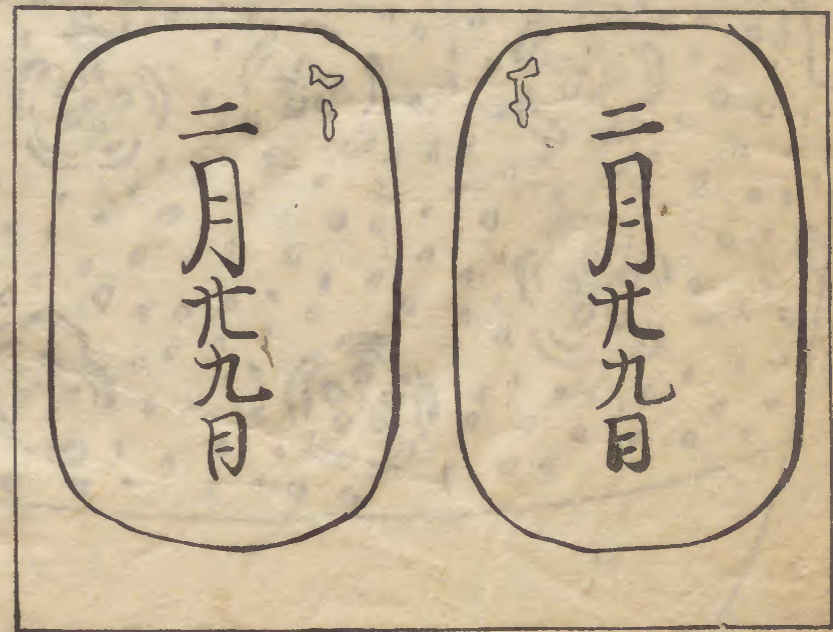
にありありあり

明子去来に此子に能なり事ハ落柿舎日記に事  
 落柿舎云代山本氏より此圖を得たり



上世四





睡餘小録上巻終

劇場シバの公験キツラと元禄寶永の時分カクのまゝおぼろり

上止



